

城上神社

きがみじんじや

大森の氏神さんである城上神社は、切り割りの峠から、ひたすら坂道を下り尽くしたすくそこにある。向こう隣りが代官所跡となるから、これを以って往還行の終着としたい。城上神社の祭神は大物主命、創建は貞観(じょうがん)五年(八六三)とされる。元々は仁摩町馬路(まじ)の城上山の山頂に在ったが、永享(えいきょう)六年(一四三三)、周防(すおう)大守の大内政弘が佐摩

大屋一大森間の古道

完 ⑩ 往還を行く

おうかん

三井 寧

(大森)の愛 あったとされる(石村も過言ではあるまい。宕山に遷し、禎久「石見銀山」。周防の大内氏は、百済王天正六年(一五七七)毛利あるいは御間名(みまな)王の末裔であると輝元が現在の地にもって来たという(以上山陰中央新報社「島根県大百科事典」より)。

大森銀山の最初の発見者は、延慶(えんきよ)一三〇八〜一三一一の頃の大内重弘で負っている、と言って

古代日本の文化・産業は、全て当時の先進地帯である朝鮮半島に負っている、と

朝鮮半島由来の氏族なのである。

自らが倭人であったと明記されている。その倭人たちは南韓人と共に、常に日韓を往來していたのである。

誤解を恐れずに言うと、彼等は一体の「海人(かいじん・あま)」というべきものである。大内の先祖も、素外(すがい)族(やから)だったのではあるまいか。海人の習性は、自らの位置を確認するために、常に山見(やまみ)を欠かさぬことにある。その過程で、遙か山頂に、なにかし祥瑞を覚えたこともあったろう。



城上神社

角折のまちづくりセンターから、佐摩の城上神社まで、都合約七キロの道のりであった。(五十猛歴史研究会 会員 みつい・あつし)

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おす木曜日」は内藤博之さんの「ガウデ」